

第13章 附属図書館



写真2 13 1

第1節 そのあゆみと現在の状況

第1項 組織と運営

(1) 大学図書館をめぐる環境の変化と附属図書館

1979年から1998年までの20年間は、大学図書館をめぐる環境が大きく変化した時期であるといえる。それは図書館業務の電算化に始まり、学術情報センターを中心とする目録・ILL（図書館相互利用）業務のネットワーク化、CD ROM資料の増大、インターネットの爆発的な発展を背景とした電子図書館化の動きである。さらに、生涯学

第1節 そのあゆみと現在の状況

習の場としての大学図書館の地域社会・市民への公開も時代の要請であり、このような変化の中で千葉大学附属図書館も、組織・施設の整備、資料の充実、サービスの拡大を進めており、現在もなおその途上にある。

(2) 組織・運営

a. 事務組織の整備

1973年4月、本館に事務部制が敷かれ、附属図書館は2課5係（整理課 総務係、受入係、整理係、閲覧課 運用係、参考調査係）となった。その後、1977年4月、閲覧課に主として雑誌に関する業務を行う学術情報係が設置され、1983年4月には研究用図書、貴重図書、特殊資料等の閲覧・管理等、旧館部分の研究用図書館としての機能を発揮させるべく運用第二係が設置された。また、1984年1月、整理課に図書館専門員が配置された。

1986年4月には、図書館業務の電算化に対応するため事務組織の変更が行われ（表2-13-1）電子計算機関係と雑誌の受付関係の業務を担当する係として情報管理係が新たにスタートした。

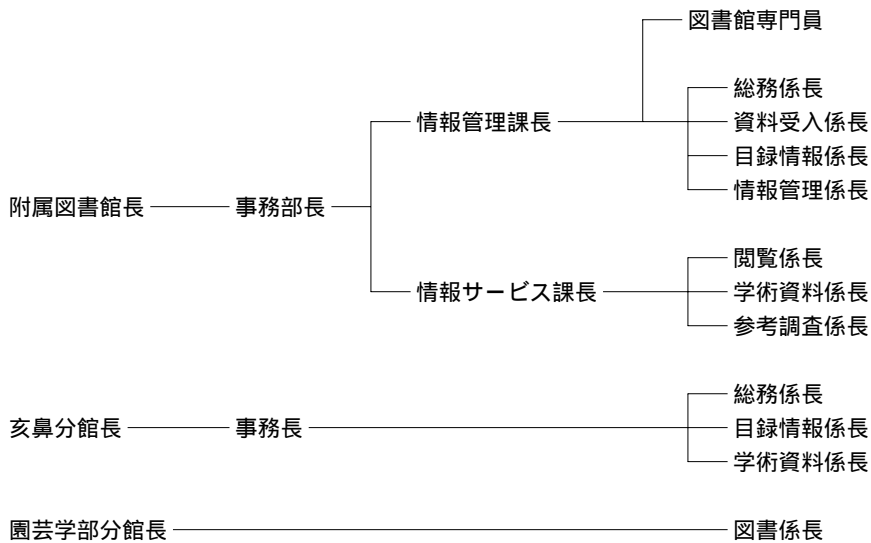
図2-13-1 事務組織の変更（1986年4月1日）

		旧	新
本館	整理課	総務係	総務係
		受入係	資料受入係
		整理係	目録情報係
	閲覧課		情報管理係
		運用第一係	閲覧係
		運用第二係	学術資料係
		参考調査係	参考調査係
		学術情報係	
亥鼻分館		総務係	総務係
		整理係	目録情報係
園芸学部分館		運用係	学術資料係
		図書係	図書係

1988年4月、国立大学附属図書館の事務組織を情報センターとしての役割と機能を遂行するにふさわしい組織に改善することをめざし、全国の国立大学のうち事務部制を設置している附属図書館において、整理課は情報管理課に、閲覧課は情報サービス課にそれぞれ改称された。

このように、附属図書館は学術情報の流通を中心とした時代の急激な変化に対応すべく、事務組織の整備に積極的に取り組み、合理的、効率的な管理・運営、組織の整

図 2 13 2 組 織 (1998年 4月 1日現在)



備・充実につとめてきた。現在の附属図書館の事務組織を図 2 13 2 に示す。なお、1997年 7月、千葉大学事務組織再編等検討委員会が設置され、図書系専門部会において、学内の学術情報関係部局の統合等について検討が行われた。

b . 附属図書館運営委員会等の活動状況

1953年 9月に学長の諮問機関として設置された附属図書館運営委員会は、1963年 6月に規程の改正が行われ、附属図書館長の諮問機関としても位置づけられ、実際の審議機関となった。さらに、1996年 4月、委員構成の見直しが行われ、新たに総合情報処理センター長が職指定とされたほか、大学院社会文化科学研究科、大学院自然科学研究科、留学生センター、外国語センター、環境リモートセンシング研究センターからも委員が推薦されることとなった。

このほか、1970年には全学的に利用しうる学習、調査および研究の基本となる図書資料の選定を行う共通基本図書選定委員会、1994年には普遍教育等の図書等の整備計画に関し審議する普遍教育等図書専門委員会および選書ワーキンググループが設置され、また1998年には千葉大学電子図書館の構築を推進する電子図書館推進委員会、外国雑誌の購読、予算、利用環境等に関し検討する外国雑誌検討委員会が新たに設置された。

一方、亥鼻分館では運営委員会、電子メディア運用委員会、将来計画検討専門委員

第1節 そのあゆみと現在の状況

会、展示専門委員会を設置し、分館固有の事項について審議・検討している。また、園芸学部分館には図書委員会が設置されている。

(3) 自己点検・評価の実施

a. 附属図書館自己点検・評価委員会の活動

1992年9月、「千葉大学自己点検・評価に関する要綱」の方針にそって、附属図書館長、亥鼻分館長、園芸学部分館長および運営委員会から選出された5名の委員、ならびに事務部から構成される千葉大学附属図書館自己点検・評価委員会が設置され、あわせて亥鼻分館自己点検・評価委員会も設置された。1994年3月、『情報化時代と千葉大学附属図書館～21世紀への新たな飛躍を目指して～』が刊行された。その内容は図書館全体の点検・評価を総括し、当面する課題を中心にまとめた「総説」の部分と、利用者サービスや管理・運営の各事項について具体的に点検・評価した「点検・評価表」の部分からなっている。この報告書では、本館、亥鼻分館、園芸学部分館の当面する課題として、①施設整備（亥鼻分館の新営、本館の増築等）、②電算システムの充実と情報ネットワークの活用、③学術資料の収集提供機能の維持強化、④事務機構の整備、⑤財政の健全化、⑥生涯学習や国際化への対応、地域社会との連携があげられ、その改善策が具体的に指摘されていることから、以後の改革はこの報告書で示した方向で進められた。

なお、園芸学部分館においては園芸学部自己点検・評価委員会がこの任にあっている。

b. 第三者評価の実施

図書館業務のうち特にサービスの改善・改革への取り組みを一層推進するため、本館では第三者評価を実施することとし、1996年1月、大学関係者、公共図書館関係者、図書館学の研究者、国立大学教員に委員を委嘱し、附属図書館第三者評価委員会を開催した。同委員会においては、①広報活動、②閲覧利用、③図書館資料、④情報提供サービス、⑤学内外との相互利用・相互協力の5項目について評価を行い、その結果は『千葉大学附属図書館第三者評価報告書』として1996年3月に刊行した。

c. 相互評価

1997年4月、大学基準協会の基準にもとづく点検評価をとりまとめた。1998年3月、大学基準協会から相互評価結果が示され、附属図書館については座席数について

指摘がありその改善が課題となっている。

第2項 施設の整備

(1) 本館

a. 新館の竣工

旧館は1968年4月に新営されたが、その後の学生、研究者の急増、蔵書の著しい増加にともない次第に施設が手狭になったため、1977年から新館増築および旧館の改修の検討が始められた。1978年7月、附属図書館運営委員会のもとに本館増築計画委員会を設置し



写真 2 13 2

具体案の作成に入り、翌年5月には同委員会での意見をもとに事務部で「増築基本方針案」を作成、この案をもとに施設部と協議し、「事務部原案」を策定、1979年10月開催の附属図書館運営委員会に提出し承認を得た。

増築に関する基本構想としては、学生のための学習図書館の色彩が強かった従来の建物（旧館）に今回の増築部分（新館）を加えることによって、研究者のための研究図書館的機能を大幅に拡充することにあつた。1980年3月着工、1981年2月、鉄筋コンクリート4階建て延べ5,170m²の新館が竣工、夏季休業期間中に旧館から図書等の移転作業を行い、8月下旬移転を完了、9月1日に開館した。

b. 旧館の改修

新館の建築とあわせて、旧館の改修工事が行われ1982年4月に旧館は装いを新たに開館した。旧館は研究図書館的機能を重視し、2階部分は和・洋雑誌と2次資料を主とした閲覧室を配置し、文献検索および雑誌関係のレファレンスを担当する学術情報係事務室、マイクロ資料室等が開設された。3階部分は、研究者の共同利用のた

第1節 そのあゆみと現在の状況

めの研究用図書や特別な主題をもったコレクションを配架する研究用図書閲覧室や研究者閲覧個室、グループ研究室、貴重書庫等を設け研究の便をはかった。

(2) 新亥鼻分館

亥鼻分館の旧建物は、1971年に附属図書館医学部分館(1,128m²)として建築された。1978年に医学部分館は、医学部、同附属病院、看護学部および生物活性研究所(現真菌医学研究センター)の4部局の複合分館として、亥鼻分館に改組されたが、施設はそのままであった。1981年、医学部旧基礎研究棟が合同校舎として改修された際、その一部(1,854m²)を仮書庫に転用することとしたが、その後、利用者数や資料の急激な増加、情報環境の変化等にともない図書館としての機能に多くの問題が生じてきた。これらの問題の解決のため、新営に関する基本方針として、医学、生命科学、看護学およびその周辺領域の教育研究を支援し、国際化への対応、また地域医療への支援、ならびに展示・博物館機能をあわせもつ「ヘルスサイエンス情報図書館構想」が生まれた。亥鼻地区の図書館の新営については、亥鼻分館発足当初からの悲願であり、毎年新営工事の概算要求が行われてきたが、1995年度の概算要求でようやく認められ、1995年8月着工、1996年7月に3,784m²の建物が竣工した。そして9月に移転を完了、11月27日に開館した。



写真2 13 3

(3) 園芸学部分館

園芸学部分館は、1963年4月に新営され、その後、書庫の手狭さなどから増築と内部改装を検討していたが、1983年3月に増築部分が完成し、同年4月から業務を開始した。増築部分は560m²で旧館(444m²)とあわせて1,004m²となり、1階に新



写真2 13 4

着雑誌とバックナンバーを配架し、主として研究者の便をはかり、2階に図書を配架して学生の利用に供している。

(4) 千葉大学の鐘（やよいの鐘）

新館の塔屋（地上27m）の千葉大学の鐘（やよいの鐘）は、千葉大学創立30周年記念事業の一環として、本学のシンボルとなるように意図してつくられたものである。新館が完成した翌年の1982年3月5日に除幕式が行われた。この鐘は直径1.2m、高さ1.2m、重量1,150kgの青銅製であり、鐘の上部にはラテン語で“AD ALTIORA SEMPER UNIVERSITAS CHIBA（常に一層高きものへ 千葉大学）”と記されている。

第3項 資料の充実

(1) 蔵書数の推移と蔵書構成

新制大学として創設されて間もない1949年当時の附属図書館の蔵書冊数は約164,000冊（教育、医学、薬学、工学、園芸の各分館を含む）であったが、その後毎年約3万冊ずつ増加し、1988年1月13日には100万冊の大台をこえた。この時点で100万冊を超える国立大学は、東京大学の590万冊を筆頭に15大学あり、千葉大学は16番目であった。また、100万冊目の図書は、『皇居 宮殿の絵画』（ぎょうせい発行）であった。各年度ごとの蔵書冊数、1998年3月末の蔵書構成および雑誌所蔵タイトル数はそれぞれ表2-13-1、表2-13-2、表2-13-3のとおりである。

表2-13-1 蔵書数（1978～1997年度）

年度	本館		亥鼻分館		園芸学部分館		和洋別合計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
1978	280,747	143,304	83,301	96,229	31,109	11,810	395,157	251,343	646,500
1979	300,768	157,610	85,480	99,102	32,497	12,397	418,745	269,109	687,854
1980	321,174	168,583	88,371	102,020	34,087	13,118	443,632	283,721	727,353
1981	343,604	180,063	90,118	103,629	35,843	13,714	469,565	297,406	766,971
1982	372,872	192,600	92,421	106,744	37,839	14,501	503,132	313,845	816,977
1983	392,957	204,121	94,496	109,172	39,634	15,294	527,087	328,587	855,674
1984	414,639	220,282	97,452	112,410	41,266	15,863	553,357	348,555	901,912
1985	430,582	232,607	101,885	115,816	42,367	16,416	574,834	364,839	939,673
1986	451,733	245,481	104,684	118,960	43,621	17,024	600,038	381,465	981,503
1987	475,361	261,335	107,719	122,182	45,187	17,837	628,267	401,354	1,029,621
1988	491,842	275,232	110,703	125,189	48,182	18,996	650,727	419,417	1,070,144

第1節 そのあゆみと現在の状況

1989	512,328	290,852	113,144	127,825	50,727	20,133	676,199	438,810	1,115,009
1990	531,851	303,458	115,749	130,675	52,668	20,796	700,268	454,929	1,155,197
1991	548,960	313,265	118,519	133,195	54,177	21,229	721,656	467,689	1,189,345
1992	565,374	324,006	120,652	135,922	55,625	22,005	741,651	481,933	1,223,584
1993	580,100	333,766	123,735	138,879	56,648	22,683	760,483	495,328	1,255,811
1994	593,291	341,360	127,611	141,577	60,329	24,416	781,231	507,353	1,288,584
1995	613,171	350,619	130,837	144,732	61,947	25,019	805,955	520,370	1,326,325
1996	628,153	356,781	133,384	147,174	63,628	25,356	825,165	529,311	1,354,476
1997	642,956	364,574	136,085	149,402	65,112	25,906	844,153	539,882	1,384,035

表2 13 2 蔵書数(分野別)1998年3月31日現在

分野	和	洋	計	割合(%)
総記	51,975	40,382	92,357	6.7
哲学	43,838	25,984	69,822	5.1
歴史	62,354	18,701	81,055	5.9
社会科学	192,623	71,957	264,580	19.1
自然科学	236,712	262,758	499,470	36.1
工学	70,522	32,186	102,708	7.4
産業	44,923	13,558	58,481	4.2
芸術	44,241	16,915	61,156	4.4
語学	29,764	19,005	48,769	3.5
文学	67,201	38,436	105,637	7.6
合計	844,153	539,882	1,384,035	100.0

表2 13 3 雑誌所蔵タイトル数(1998年3月31日現在)

	本館	亥鼻分館	園芸学部分館	合計
和雑誌	7,416種	1,810種	1,507種	10,733種
洋雑誌	5,441種	2,742種	590種	8,773種
合計	12,857種	4,552種	2,097種	19,506種

(2) 図書資料の充実

附属図書館の資料は、①共通基本図書・参考図書、②普遍教育のための資料、③学部等における専門教育のための資料、④教員の研究用資料、⑤留学生のための資料等に大別することができる。それぞれについて、委員会や教員により選定が行われ、資料の充実がはかられてきた。全学的に利用できる学習・研究の基本資料を整備するための「共通基本図書・参考図書」の経費は、1970年度に当時の運営委員会の努力により予算化されたもので、共通基本図書選定委員会が選定にあっている。なお、今後の学内資料の整備にあたって、さらなる有効活用について検討されているところであ

る。学習図書の実を意図する普遍教育のための資料の収集・選定については、1994年度に千葉大学教育委員会のもとに設置された普遍教育等図書専門委員会の下部組織である選書ワーキンググループが担当することとなった。これは、千葉大学の教育改革にともなう教養部の廃止（1994年3月）、普遍教育の導入（1994年4月）にともなう措置であり、「幅広く深い教養」、「総合的な判断力」、「豊かな人間性の育成」という普遍教育の基本的理念にそった資料の選定を行うこととなっている。また、学術図書の充実を目的とする学部等における「専門教育のための資料」や「教員の研究用資料」については、文部省が全国の国立大学に配分する学生用図書購入費、特別図書購入費（大型コレクション、人文・社会系特別図書）等により充実をはかっている。

（3）留学生用図書の整備

千葉大学には多くの外国人留学生が在籍している（1998年5月1日現在589名）。これら留学生の専門教育の学習に資する基礎的図書を収集・整備し、教育・研究を支援するため、1990年度から学内措置による整備が始まり、1997年度からは文部省への予算要求も行っている。また、1995年度には千葉大学短期留学国際プログラム（JPAC）のための資料の整備を行い、今後は電子情報利用環境の整備も計画している。なお、図書は全て本館2階、留学生用図書コーナーに集中配架している。

（4）電子的情報資料

近年の電子的情報資料の増大に対処するため、文部省では1992年度から図書館高度化設備費として電子的情報資料購入費を予算化し、CD ROM等の充実をはかることとなった。本学図書館においても、数次にわたりこの予算の配分を受け、各種のCD ROM資料の整備を行っている。

第4項 電算化と学術情報サービス

（1）図書館業務の電算化の経緯

附属図書館の電算化は、1979年中型コンピュータの導入により進められたが、雑誌関係業務から始まり、1981年には学内雑誌の所蔵のオンライン検索が可能となった。その後、学術情報センターを中心とする国立大学図書館を核とした全国総合目録の共同作成が開始され、1987年附属図書館も学術情報センターと接続し参加館となった。なお、この間1981年6月には雑誌管理業務の電算化による改善により、「昭和56年度

第1節 そのあゆみと現在の状況

国立大学図書館協議会賞」を受賞している。

表 2 13 4 電算化の経緯

1979年 1月	図書館用の中型コンピュータを導入。NEACシステム200。メモリ288KB、ディスク容量300MB、カナ、英数字のみ。
4月	コンピュータによる図書貸出業務を開始。
9月	コンピュータによる雑誌業務（予約等バッチ処理）を開始。
1980年 1月	コンピュータによるオンライン雑誌受付業務を開始。
1981年11月	コンピュータによる学内雑誌オンライン検索システムを開始。
1982年 3月	亥鼻分館に端末装置を設置。
4月	コンピュータによる図書受入、予算管理業務を開始。
1986年 3月	NECシステム150/88VSを導入。メモリ6MB、ディスク容量1GB。日本語処理が可能となりコンピュータによる目録業務を開始。
1987年 3月	学術情報センターのコンピュータとの接続（DDXパケット交換網）が完了し、目録情報サービスが可能となった。
4月	亥鼻分館および園芸学部分館において、コンピュータによる図書貸出業務と雑誌受付業務を開始。
1988年 3月	総合情報処理センターの学内ネットワーク経由で亥鼻・園芸学部分館が学術情報センターと接続された。
1990年 9月	NECシステム3100/A70を導入。メモリ16MB、ディスク容量2.2GB。図書館パッケージLICS/U、端末24台。
1993年 2月	NEC ACOSシステム630/Cを導入。メモリ32MB、ディスク容量20.8GB。図書館パッケージALIS、端末37台。
1994年 4月	本館で全国国立大学附属図書館に先駆けてホームページを公開。
1996年 3月	亥鼻分館にCD-ROMサーバシステム（OVID Net）を導入。
1997年 2月	NEC Express5800/160PROをデータベースサーバするクライアントサーバシステムを導入。メモリ384MB、ディスク容量28GB。図書館パッケージLICSU/21、サーバ機6台、端末54台。サーバにWindows NT、クライアントにWindows95を使用。データベースエンジンはOracle、検索キー作成はHappinessを採用。
3月	本館にCD-ROMサーバシステム（NSCD Net）を導入。
1998年 2月	千葉大学電子図書館実験ホームページを開設。

(2) 附属図書館情報システム（CULIS）の構築

業務の電算化を進める一方、附属図書館では当時の工学部電子工学科池田研究室、池田宏明助教授、檜垣泰彦助手の協力により蔵書検索システムの構築に着手した。まず、1986年3月に情報処理センターに雑誌検索システム（LISIC）を構築し、研究室端末から附属図書館所蔵雑誌の検索が可能となった。次に、1989年10月には同じく池田研究室（工学部電気電子工学科）により、図書検索システム（LISICB）が開発され、雑誌同様図書についても研究室端末からの検索が可能となった。そして、1994年4月には千葉大学附属図書館情報システム（CULIS：Chiba University Library In-

formation System) を構築し、全国国立大学附属図書館に先がけてウェブサイト (URL : <http://www.ll.chiba-u.ac.jp/>) を公開した。このシステムはワークステーションNEC EWS4800/330をサーバとして、図書館から情報発信を行うシステムで、学内LANやインターネットに接続したパソコン等からアクセスすることができ、図書館の蔵書検索だけでなく、図書館からのお知らせ、利用案内、図書館報等の情報のほか、外部情報のナビゲーションを提供している。

(3) 学術情報サービスの変化

近年の情報技術の進展は、図書館サービスのあり方にも影響を与え、従来よりの紙媒体資料の提供に加えて、データベース検索システムやネットワークを利用したCD ROMの検索システムについても新しい形の情報サービスとして整備が進められている。

a . オンライン情報検索

本館では、1979年1月に東京大学大型計算機センターが提供するTOOL IRのサービスを開始し、さらに、1980年1月からはJICST (日本科学技術情報センター、現在は科学技術振興事業団) が提供するJOISによるサービスを開始した。さらに1986年4月からはアメリカのDIALOG Information Service社のDIALOGと筑波大学学術情報処理センターのUTOPIAのシステムを加えサービスの充実をはかった。その後1987年4月からNACSIS IR (学術情報センター) 国文学研究資料館データベース検索システムを加え、現在にいたっている。

亥鼻分館ではよりはやく1978年9月にJOISによるサービスを開始している。

b . CD ROMデータベースサービス

オンライン情報検索に加えて、本館ではCD ROMデータベースサービスを1988年4月より開始した。最初に導入した資料は、『人物情報 (現代日本科学技術大事典・現代日本執筆者名大事典)』と『朝日新聞記事』の2点である。その後、PsycLit、ERIC、『世界大百科事典』等の資料を加え、1998年現在、本館では約45タイトルのCD ROMを所蔵している。1997年6月からはWindowsNT版CD ROMサーバ (NSCD Netシステム) を導入し、ネットワークによるサービスを開始した。図書館のホームページからサーバにアクセスすることによって、CA on CDやOxford English Dictionary、『広辞苑』等をネットワークを通じて利用することが可能になった。ま

第1節 そのあゆみと現在の状況

た、亥鼻分館でも1990年1月より、MEDLINEによる検索サービスを開始し、1996年3月にはCD ROMサーバ（OVID Netシステム）を導入、学内LANによるサービスを開始した。園芸学部分館では1994年よりスタンドアロンの形でAGRIS、HortCD等を提供している。

c. 電子図書館への取り組み

附属図書館では、1997年5月に電子図書館検討ワーキンググループを設置して、電子図書館化について検討を開始し、1998年3月、『千葉大学電子図書館の構築とその実現に向けて 平成9年度報告』を取りまとめた。具体的な取り組みとして1998年2月に「千葉大学電子図書館実験ホームページ」を立ち上げ、以下のような実験や準備を行った。

- ・大学院自然科学研究科博士論文の電子化
- ・田中文庫の科学研究費補助金研究成果公開促進費 データベース 申請およびデモ版「主の祈り」のホームページ上での提供
- ・ゐのはな古医書コレクションのデータベース化
- ・学術情報センターからデータベース（5種類）の受領および検索システムの設計

第5項 利用者サービス

(1) 開館時間

附属図書館のサービスのあり方については附属図書館運営委員会および附属図書館自己点検・評価委員会における審議や利用者からの意見（「図書館の利用に関するアンケート調査結果報告書（1996年2月刊行）」等参照）をもとに検討をすすめてきた。開館時間の問題はその重要な課題の1つであり、「アンケート調査」によれば、開館時間の延長や日曜開館を望む声が多く、本館では1996年4月から開館時間をそれまでの9：00～20：00から9：00～21：45（平日）に延長し、あわせて日曜開館（12：30～18：00）を実施した。また、週休2日制移行以後の土曜開館については、本館（12：30～18：00）、亥鼻分館（13：00～17：00）ともに当初から対応しているが、園芸学部分館（12：30～16：30）は1995年9月から実施している。

なお、利用者サービスの一環として、亥鼻分館では1980年5月より閉館時に図書館を利用できる特別利用サービスを開始し、また、本館でも1982年4月より旧館部分において同様のサービスを開始した。

(2) 利用の推移

過去20年間における入館者数、図書の館外貸出冊数および文献複写件数は、それぞれ表2-13-5、表2-13-6、表2-13-7のとおりである。

表2-13-5 入館者数（*は推定数）

年 度	1978	1980	1985	1990	1995	1996	1997
本 館	367,722	458,581	580,893	541,929	637,615	665,642	582,532
亥 鼻 分 館	*29,400	*56,900	53,922	115,075	116,867	77,204	86,893
園芸学部分館	22,222	28,247	54,590	104,850	127,281	128,154	126,435
合 計	*419,344	*543,728	689,405	761,854	881,763	871,000	795,860

表2-13-6 館外貸出冊数

年 度	1978	1980	1985	1990	1995	1996	1997
本 館	57,530	76,658	87,403	98,509	115,112	115,462	115,892
亥 鼻 分 館	8,781	12,518	14,124	11,826	9,969	7,785	13,990
園芸学部分館	6,496	9,129	11,106	5,416	6,909	7,314	7,352
合 計	72,807	98,305	112,633	115,751	131,990	130,561	137,234

表2-13-7 文献複写受託・依頼件数

年度	本 館		亥鼻分館		園芸学部分館		合 計	
	受 託	依 頼	受 託	依 頼	受 託	依 頼	受 託	依 頼
1978	325	419	2,078	1,200	50	79	2,453	1,698
1980	529	700	1,329	1,729	270	244	2,128	2,673
1985	1,412	2,559	3,603	2,609	325	422	5,340	5,590
1990	1,926	2,717	4,867	1,736	411	701	7,204	5,154
1995	4,626	1,844	6,036	3,634	695	1,073	11,357	6,551
1996	4,585	2,255	2,195	3,687	868	1,161	7,648	7,103
1997	4,843	3,118	6,192	4,591	988	1,419	12,023	9,128

亥鼻分館の1996年度には新館への移転および閉館にともなう準備のための完全閉館（1996.9.7～9.23、11.18～11.26）部分閉館（8.10～9.6、9.24～11.17）がある。

(3) サービスの自動化

利用者サービスの拡大と業務の省力化をはかるために、附属図書館では、本館、分館において各種のシステムを順次導入している。まず、ブックディテクションシステムは、本館では1989年4月より、亥鼻分館では1996年11月より、園芸学部分館では1998年4月よりそれぞれ運用を開始した。また、自動入館システムは、本館では1997

第1節 そのあゆみと現在の状況

年4月より、亥鼻分館では1998年1月より運用を開始した。さらに、図書自動貸出返却システムを本館、亥鼻分館において1998年4月より稼働させ新しい利用者サービスの拡大をはかっている。

(4) 生涯学習への対応

a. 一般市民への公開

現在の生涯学習社会においては、大学の地域社会への協力や教育研究機能の市民への公開が強く求められている。国立大学図書館協議会が1986年9月に報告した「国立大学図書館における公開サービスに関する当面の方策について」では可能な限り大学図書館の一般市民への公開が提言されているが、附属図書館でも、この趣旨にそって、図書館の公開に関する委員会を設置して審議をかさね『千葉大学附属図書館の一般市民利用要領』を作成し、1990年4月から実施した。

実施後における、一般市民利用者数の推移は表2 13 8のとおりである。

表2 13 8 一般市民利用者数

年 度	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
本 館	639	737	649	1,096	1,875	3,526	4,608	5,062
亥 鼻 分 館	840	863	586	604	428	544	275	150
園芸学部分館	18	21	36	40	54	67	106	98
合 計	1,497	1,621	1,271	1,740	2,357	4,137	4,989	5,310

b. 地域社会への協力

一般市民への図書館の公開をはじめとして、図書館と地域社会とのつながりは強くなりつつあるが、1996年11月より本館新館エントランスホール脇に「地域交流コーナー」を設置し、「けやき倶楽部」や千葉大学公開講座受講者等の地域住民に交流の場を提供している。また、1994年1月に設立された、千葉市図書館情報ネットワーク協議会に加盟し、地域における図書館等との連携・協力につとめている。

亥鼻分館においても、千葉県内の医療機関従事者に対し情報提供等の支援をするために3階に「地域医療サービスコーナー」を設けている。

第6項 広報活動

(1) 広報

附属図書館では図書館の活動の内容を学内外へ周知することにより、より使いやすい図書館とするために広報活動につとめてきた。冊子体で刊行されるものとしては『千葉大学附属図書館報 図書館の本』(年3回刊行)があり教職員や学生に配布している。また、利用案内については本館、亥鼻分館、園芸学部分館においてそれぞれ刊行され主として学生に配布している。

本館においては、『附属図書館概要』(年刊)を刊行しているが、1996年に外国人留学生や見学者のために英文の図書館概要CHIBA UNIVERSITY LIBRARYを刊行、1998年には、教員が教育・研究を行うために必要な資料の購入手続き、図書館の提供するサービス等を紹介した『千葉大学附属図書館本館利用案内 教員用』を刊行した。

その他、1985年には『図書館で学ぶために(改訂版)』を、1995年には『千葉大学教員の選んだ100冊』を刊行している。

また、亥鼻分館では、『亥鼻分館ニュース』1号～7号(1978～80)、『らいぶらりいぬのはな』8号～26号(1983～1991)を発行したが、以後休刊している。

(2) 資料展の開催

図書館資料を公開展示することにより、資料に対する関心を喚起し、理解を深めることを目的として、附属図書館では本館を中心として1986年以来ほぼ毎年資料展を開催してきた。本館における主な展示内容と開催年月は次のとおりである。

「欧米人のみた日本 鉄砲伝来から明治維新まで」(1986年1月～3月)

「江戸時代の縞模様 ストライプとチェックのデザイン」(1987年10月)

「小池文庫の中から 山岳図書を中心に」(1988年1月～3月)

「日本近代科学の黎明 蘭学 東洋医学古書コレクションから」(1994年4月)

「アダム・スミスコレクション展」(1997年4月)

「図案からデザインへ 東京高等工芸学校蔵書と日本近代デザインの成立過程」
(1998年1月～2月)

なお、亥鼻分館においては、東洋医学古書コレクションを中心に1988年度、1996年度に展示会を開催したが、現在の新館が完成した1996年11月からは、展示ホールにお

第2節 将来の構想と課題

いて亥鼻地区4部局(医学部、同附属病院、看護学部、真菌医学研究センター)がそれぞれのテーマごとに通年展示を行っている。

第2節 将来の構想と課題

現在、大学図書館をめぐる状況は大きく変化しており、情報環境の大きな変革の時期にあって、図書館は現在を充実させると同時に、将来のあり方について検討することが求められている。特に、新しい高度情報化時代に対応したサービス、すなわち、電子図書館的機能の充実や、そのようなサービスを可能にするための組織・施設の整備が課題といえるだろう。また一方、伝統的な図書資料の収集・利用等についても十分な検討を進め、利用者の要求に対応することも必要である。

第1項 事務組織の再編成と施設整備

(1) 事務組織の再編成

1997年7月、千葉大学は事務組織のあり方、事務運営の具体案について検討するため「千葉大学事務組織再編等検討委員会」およびその下に庶務系・経理系・学務系・図書系・医学系の各専門部会を設置した。図書系専門部会においても4回の部会を開催し、最終報告「附属図書館のあり方(1997年10月)」を取りまとめた。その骨子は、①庶務系・経理系事務の事務局への集約、②部局に分散している図書資料の集中化、③情報処理関係部局の再編成であるが、その後、各専門部会の報告をもとに「千葉大学の事務処理体制の再編整備について(1998年1月)」がまとめられた。そのなかで、附属図書館に関する部分は、①図書および学内の学術情報関係部局事務を統合することについて検討を続ける、②将来、事務局に「学術情報部(仮称)」を設置する、③亥鼻分館事務部を本館事務部へ集約するとあり、今後さらに検討が行われることとなっているが、適正な人員配置を行うことによって組織の活性化をはかることが今後の課題である。なお、園芸学部分館については、園芸学部が西千葉地区に移転した場合は、本館に統合されることが図書系専門部会の検討の中で了承されている。

(2) 施設整備

本館は1968年の新営以来、1981年の増築を経てすでに30年を経過した。この間、蔵

書冊数の増加にともない収蔵スペースは限界に近く、現在資料の再配置を含む現有スペースの見直しが行われている。しかし、今後学内共同利用体制の整備にともなう資料の集中化や新しい時代に対応した図書館サービスを展開していくためには、本館の新嘗が不可欠であり、園芸学部の西千葉地区移転を踏まえた新館構想を検討する必要がある。

第2項 電子図書館化の推進

(1) その背景と附属図書館の取り組み

1996年7月、学術審議会は「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について(建議)」を取りまとめた。この中には、大学図書館に電子図書館的機能を整備していくことが急務であり、その整備にあたっての基本的考え方および必要な方策等について述べられている。文部省では現在、電子図書館システムの研究開発やモデル的電子図書館の構築を進めている。第1節第4項(3)c.「電子図書館への取り組み」でも述べたように、千葉大学附属図書館においても1997年度に「電子図書館検討ワーキンググループ」を設置し、構築に関わる課題について検討を行ったが、1998年4月、附属図書館運営委員会のもとに附属図書館電子図書館推進委員会を設置、電子図書館に関する取り組みをさらに進めることとした。システムのコンセプトは先の電子図書館検討ワーキンググループでの報告をもとに今後さらに検討することとなるが、具体的には、所蔵資料目録情報の電子化、所蔵資料の電子化、電子化された資料の収集、検索機能の高度化、電子サービスの拡大等が考えられ、それにともなって学内情報基盤の整備や著作権処理、経費の確保等、今後検討すべき課題は多い。

(2) 所蔵資料目録情報の電子化

電子図書館化の基盤となる所蔵資料目録情報の電子化は最も重要な課題である。本館には現在約45万件の未入力データが残されているが、これらの目録データの遡及入力は国立大学図書館協議会から配布を受けたCATP Autoの活用により、1998年10月から入力システムの整備および入力を開始することになっており、本格的には1999年から5年計画として進められることとなっている。

第3項 資料の効率的収集と共同利用の促進

(1) 学内資料の収集体制の整備

a. 共通基本図書購入費の考え方

共通基本図書購入費については、従来より継続資料等の購入について検討されてきたが、1998年度において予算の執行、資料の選定方法等について大幅な見直しを行った。すなわち、利用の少ない高額資料購入を中止し、代わりに全学共同利用の面から必要と考えられるCD ROM資料、コア外国雑誌、新規図書等を購入することとし、また中止した資料の代替手段となるデータベースのオンライン検索利用料金を負担することとした。

b. 外国雑誌検討委員会の設置

外国雑誌に関する全学的なあり方、電子ジャーナル等の円滑な利用等について協議することを主旨として、外国雑誌検討委員会を1998年5月に設置した。購入雑誌の重複の解消、資料の図書館への集中化、高額資料の共同購入、コア雑誌の選定、電子ジャーナルの導入等検討すべき課題は多いが、特に資料の効率的収集と共同利用の促進は重要課題として取り組むことになっている。

c. 普遍教育図書選定体制の整備

第1節第3項(2)「図書資料の充実」でも述べたが、普遍教育のための資料の収集・選定については、普遍教育等図書専門委員会がその任にあっている。今後、大学教育委員会の専門教員集団との連携強化をはかり、より一層の体制の整備が必要である。

(2) 学内資料の共同利用環境の整備

a. 資料の集中化と共同利用

図書資料の共同利用を目的として、1982年に本館旧館2階に「数学系雑誌コーナー」が設置され、教育学部、理学部、工学部、教養部で購読中の数学系雑誌計307タイトルが配架された。1998年には工学部応用化学科の化学系雑誌約80タイトルの図書館への集中配架が行われ、また、文学部、教育学部からの雑誌移送も検討されており、今後も集中化に向けて働きかけを行う必要がある。

b . 閉館時利用

1982年の「数学系雑誌コーナー」の設置と同時に旧館には閉館時入退館装置（当初はホログラムカード方式、現在はキーカード方式）が設置され雑誌閲覧室の24時間利用が可能となった。しかし、今後の図書館への資料の集中化にともない予想される利用者の増加に対処して、夜間入口の増設等利用環境の整備の必要がある。

(3) 今後のあり方

全国国立大学附属図書館の蔵書数等に関する統計（日本図書館協会、1995年度）によると、本学附属図書館は蔵書数で16位、年間増加数で14位、資料費で12位である。しかし、学生数の多さ（7位）のため、学生1人あたりの蔵書数は82位、また学生1人あたりの資料費は59位、職員1人あたり学生数は93位となっている。

全国有数の学生を抱える本学としては、学術図書、雑誌についてより一層の整備・充実をはかり、また、共同利用の促進によって不必要な重複購入を避けるとともに安定的な予算措置について検討、努力を重ねていく必要がある。そのために今後は、より一層学内での資料収集体制を整備し、全学的見地からの予算の要求、執行、資料の選定、蔵書構成等について検討を進めていくことが必要である。また、同時に今後ますます増えるであろう資料の集中化や共同利用に対処するために、閲覧、配架スペースの見直し、24時間利用体制の整備等、利用環境についてさらに検討することも重要な課題である。